

## なぜ、漁獲量は減ったか - 4

### フナ類

霞ヶ浦北浦における、フナ類の漁獲量の年変化を下図に示しました。

現在のフナ類の漁獲量は、最盛期（昭和47～51年）の1/10以下にまで低下しており、平成6年では霞ヶ浦で95トン、北浦では24トンとなっています。

いろいろな種類の漁獲量が減少している中で、フナ類は最も減少スピードが早い魚種とみられています。

近年、張網漁業が衰退していますが、かつては、その漁獲量の大半を占めていた、エビやハゼ類の漁獲量が減少したこと、そしてフナ類の漁獲量が激減したことが、その大きな理由ではないかと考えられています。

霞ヶ浦北浦には、昔から「キンブナ」、「ギンブナ」、「ゲンゴロウブナ（ヘラブナ）」の、3種類のフナが確認されていますが、この3種類のフナの、湖内で占める割合は、時代と共に大きく変化してきているようです。

この3種類のフナの占める割合を、平成7年と昭和46～47年当時とについて比較し、表に示しましたが、近年では「キンブナ」の割合が減少し、逆に「ギンブナ」の割合が、相対的に大きくなっていることがわかります。

フナ類の漁獲量が、大きく減少してきている事実と共に、3種類のフナの占める割合が、変わってきているのも、大変興味深いことです。

これらの3種類のフナは、形態が違うように、食べる餌や産卵時期、好適生息環境なども微妙に違っています。

フナ類の漁獲量が減少していることと、以前と比べて「キンブナ」が減って、相対的に「ギンブナ」の占める割合が増えていることとは、互いに密接な関係があると考えられています。

そして、これらの現象の最大の原因は、産卵場である藻場が減少していること、とりわけ、沈水植物帯（ホザキノフサモ、エビモ、センニンモ等の水中に繁茂する水草）の消滅にあることが明らかになってきています。

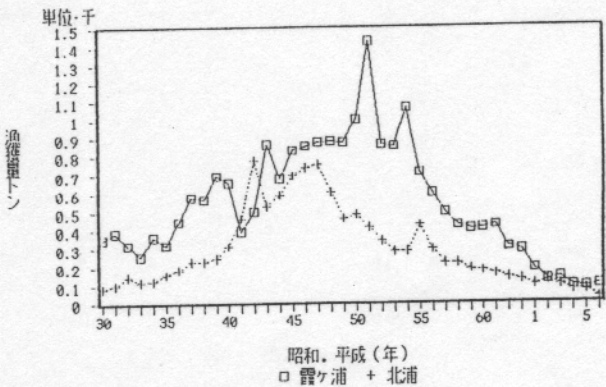
なお、「ヘラブナ」については、ここ数年来、放流が行われているので、その結果、占める割合が急増しているものと思われます。

ところで、最近、霞ヶ浦北浦でこれまでみられなかった形のフナがいる、という声を時々聞くことがあります。すぐに思い浮かぶのは、交雑種（かけ合わせ）が、存在するのではないかということです。

先に述べた3種類のフナの中、「ギンブナ」は特異な生殖方法を有していて、湖内に生息する全ての個体がメスで、メスだけで繁殖しています。

また、「ギンブナ」から生まれた子供は、全て「ギンブナ」になり、交雑種はできないと考えられていますので、もし、フナの交雑種がいるとすれば、「キンブナ」と「ヘラブナ」の「かけ合わせ」ということになります。

そこで、1年間、主に張り網でフナを集め、詳細に検討してみましたが、交雑種の存在は確認できず、現時点では、フナ同士の交雑種の存在については、否定的に考えています。



霞ヶ浦北浦におけるフナ類の漁獲量の推移

霞ヶ浦北浦におけるフナ類の種組成の変化

時期	種類	キンブナ	ギンブナ	ヘラブナ
昭和46 ～47年		24 ~ 40 %	60 ~ 70 %	0 ~ 2 %
平成7年		8 %	84 %	10 %

養殖業者の皆さんへのお知らせ

ギンブナ（マブナ）卵の試験供給について

現在、養殖魚種の多様化を目的として、ギンブナの養殖試験を行っていますが、5月初旬に卵を試験的に供給したいと考えています。供給数量に限度があるため、配布に先立って、各組合を通じて希望数量調査を行いますので、その節はよろしくお願いたします。

